

書評

福井次矢・他 編集

臨床倫理学入門

服部 健司(群馬大教授・医学哲学・医学倫理学)

医療倫理学が大きな関心を集めるようになってきている。けれども医療倫理学が、いわば刺身のツマでなく、儀礼や訓示としてでもなく、医系教育機関でしっかりと教えられるようになってきたのは、ごくごく最近のことにすぎない。そこで多くのベテラン医療者は、医療倫理学を独学する必要に迫られている。かつて心電図やCT、エコーがそうであったように。

今日、書店の棚には実にたくさんの医療倫理学書が並んでいる。それらの多くは、哲学・倫理学者の手になるものであって、知識や議論の蓄積を伝えることを主眼とした啓蒙教育書であるか、純粋に学問的研究を志向した専門書であるか、いずれかであるといってよい。著者の個人的な医療倫理観を開示しただけのものも散見される。そうしたなかで、本書の特性は明確である。

すなわち本書は、複数の医療者とひとりの倫理学者とによって著されており、そのねらいとするところは、医療者が臨床現場で「日常的にしばしば遭遇する倫理的問題」を同定、分析したうえで、著者らが適切と考えるその解決策を、根拠や倫理的な思考の道筋とともに、具体的に示すことにある。ほとんどの章節がケース提示からはじまり、そのケースに内在する倫理問題を解くために必要な背景的な論点の整理や解説、歴史的症例への目配り、さまざまな論者の意見の紹介、といった具合に叙述がふくらみ、最後には著者らの見解が示される、という組み立てになっている。抽象的な議論に終始して結論は玉虫色などということがない。その意味で、すぐれて実践的な書だということができる。

1つひとつの章節はコンパクトで、一気に読むことができる。また図表がふんだんに盛られているため、とてもすっきりしていて、ポイントがよく見えてくる。

だが本書は、単なるマニュアル型の指南書におさまるものでは決してない。読者自身の「倫理的に考える能力」に磨きがかかるように、倫理委員会やガイドラインといった外的な規律規制とは独立に、また慣習の縛りをほどいて、「1人ひとりが自発的に倫理的に好ましい」判断と行動を行えるように、そして個々の症例で最善の結果が得られるように、との著者らの希いが、そのための工夫のかたちを伴って随所に見てとれる。相当数の(英語圏のものを中心とした)文献が網羅されており、著者たちの勝手な倫理観を押しつけられるのではないか、というご心配は不要である。

「臨床倫理学の基礎理論」という節では、近現代の倫理学説の川の流れ、そして臨床倫理学という山へのいくつもの登山道が一望のもとに見渡せるし、実録「エシックス・ケース・カンファレンス」は最終章を飾るにふさわしい。読んでいてわくわくする。

白状すれば、私自身、本書のもととなった『病院』誌の連載が毎月楽しみで、パワーアップした本書の刊行を心待ちにしていたひとりである。ひとりで読んでも得るところが大きいのが、教育現場でも十二分に活用できる有用な書として、本書を広くお勧めしたい。

(B5判 568頁 定価2,940円(本体2,800円+税5%))
2003年 医学書院 刊